

Title	エリッヒ・ハッシンゲル 第十六世紀の世界史的位罜
Sub Title	
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1953
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.46, No.11 (1953. 11) ,p.959(77)- 961(79)
JaLC DOI	10.14991/001.19531101-0077
Abstract	
Notes	論文紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19531101-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

をも當然含むものである。先に上げた經營形態の問題と關連して配給機能の縮少を意識するに至るは技術本位の配給観として、更に經濟的に解明することを提言している。

第四章の經營財務論は經營財務の問題を經營技術的にとり上げるばかりではなく、資本蓄積の問題と直結してとり上げる。經營財務の過程の分析も以上各章の立場より行われるが、企業金融の方法は産業資本の金融資本からの自由を基準として認識するに至る。

第五章の經營組織論は經營組織の問題としてその構造をとり上げる。組織が人と人の結合として思考せられ、分業と協業なる形を認識する限り共同體又は有機體としての組織観は成立し得る。然しながら經營組織は經營機能の構造として理解し、協働なる形をとる經營活動の構造と考えられる。その中心なるものは職務の擔當者たる人間である。かかる人間は職能を通じて自己を顯現する。企業の自己目的と人間との自己目的とは生活問題としては共同體觀を待つまでもなく意識せられるであろう。むしろ共同體における個々の人々が共同體の從屬して、個人の權利を主張し得ないという近代の矛盾が經驗科學的認識を要求するものではないだろうか。經營組織原理はかかる分析の中に行爲の基準を認識せるものであるといえよう。

以上各論を通ずる國民經濟の發展を理念とする經營經濟の分析態度は、第六章の經營自立論に扱われる資本蓄積、經營自立、經濟指導なる諸條件を意識し得る。従つて目下の問題とし

て特に我國などに於いては此等の問題が經濟再建の目標となるとする。「經濟の動きは……所詮、人間によつてつくられたものであり、そのかぎり人間の決意によつてかえることのできるものである」からである。

以上限定の紙数をやや越えたが、池内博士の經營の問題とその分析の態度について概観した。或は誤解の點があるかもしれない。にも拘らず先にも述べた如く企業が家計乃至國民經濟に奉仕するものとの認識に立つ限り、共同體觀、經營者の問題、勞使關係管理の問題等々が正しく理解せられ、従つて亦行爲の基準設定が行われるか否かは充分検討を要するであろう。然しながら人間生活の問題を意識し經濟發展を理念とした經營經濟の問題を體系づけた本書は現實の問題を克服する礎石たることを疑わない。(森山書店刊、二八六頁) (昭二八、八、六)

論文紹介

エリッヒ・ハッシンゲル

『第十六世紀の世界史的位置』

Erich Hasinger, "Die weltgeschichtliche Stellung des 16. Jahrhunderts." Geschichte in Wissenschaft und Unterricht 2. Jahrgang, Heft 12 Dezember 1951 S. 705-718.

第十六世紀とは一體如何なる時代か。普通の時代は、單純に宗教改革の時代、海外發見の時代といわれて來た。中世的束縛がこの時期に入つて決定的に粉碎され、かくして第十六世紀は、新しい世界史的段階のための一應の始點と看做されるに至つたのであつた。

例えばハイデルベルグの一神學者エルンスト・トレルチは、第十六・七世紀を、「ヨーロッパ史における宗教の時代」と看做し、中世と近世との間に、これを位置せしめているのである (Vgl. Ernst Troeltsch, "Die Bedeutung des Protestantismus für die Entstehung der modernen Welt" 1906)。

これに對しゲルハルト・リッターは、第十六世紀に起つた變

化が何も精神面にのみ限つて現われたとは思わない。寧ろリッ

ターは、長期の準備期間を経て第十五世紀末に至りヨーロッパの南部及び西部に出現した反封建的な近代國家の形成のなかに、第十六世紀を以て一つの大きな轉期と看做す重要な要件を見出そうとした。リッターに依れば、國家の權威は、既に當時においてヨーロッパの大部に及び、早くも教會の權威を凌駕する程に強大なものとなつていたのであつた (Vgl. Gerhard Ritter, "Die Neugestaltung Europas im 16. Jahrhundert" 1950)。

又ウィルヘルム・ポイケルトは、第十六世紀を「農民的・神話的・魔術的文化から市民的・合理的文化への大きな轉期と看做している (Vgl. Will-Erich Peuckert, "Die große Wende. Das apokalyptische Saeculum und Luther" 1948)。

然しエルンスト・トレルチ、ゲルハルト・リッター、ウィルヘルム・ポイケルト等の諸論者においては、エメルハルト・ケッセルに依れば、これ等のいずれの論者においても、第十五世紀から第十六世紀への推移が、「中世から近世へのヨーロッパの決定的移行」と解され、第十六世紀を以て一つの大きな轉期と看做す重要な理由として、宗教改革が根柢に考へられていた (Vgl. Eberhard Kessel, "Zeiten der Wandlung" 1950)。

スイスの歴史家ウェルナー・ネフは、かかる見解に反對し、

嘗て、「一五〇〇年に、文化史の面においては全く一つの轉期がある。然し政治史については、これが妥當しない。轉期は寧ろ數世紀前にある」(Werner Naf, "Die Epochen der neueren Geschichte 1940, Bd. I, S. 140) といった。事實、ネフに依れば、第十三世紀末から第十五世紀初に、ヨーロッパの政治的發展において重大な一つの轉期があるのであり、寧ろこの時期こそ近世の始點が求められるべきであつたのである (Vgl. Werner Naf, "Frühformen des Modernen Staates" Historischen Zeitschrift 171, 255 ff.)。

ジョージ・マコーレ・トレヴェリアンは、テューダー朝の始祖ヘンリー七世が即位した一四八五年を以て近世の二應の始點と看做しているが、然しかかる時代區分の態度そのものについては、依然として深い疑問を抱いていた。即ちトレヴェリアンに依れば、「何時イギリスにおいて中世が『終つた』か」と、その年代、若しくはその時代すらを探つて見るという事は、實に無益である。人々がいい得ることのすべては、第十三世紀において、イギリスの思想や社會が中世的であり、そして第十九世紀においてそうではなかつたということである。然し今日においてすら我々は、例えば、君主政治・貴族階級・召集議會の下院・イギリス慣習法・法治政治に解釋を興える裁判所・國教會の教階制度・教區制度・大學・公立學校及び文法學校といったような、中世の諸制度を持つてゐる。そして我々が全體主義の國家に似合の國民となつて、イギリス人たるの事實をすつ

かり忘れてしまふことのない限り、我々の考え方のなかには、……常に何か中世的なものが残るであらう。……歴史の描く模様は、實に纏れた蜘蛛の巣のようなものである。簡単な圖式に依つてその無限な複雑性は説明されなう」(George Macaulay Trevelyan, "English Social History" 3 ed. 1948, pp. 93—96) のであり、第十六世紀に對して何か積極的な意味付けをすることを、このようにトレヴェリアンは寧ろ避けようとしたのであつた。

オットー・ブルンナーは、宗教改革を以て近世の始點と見なしている。ブルンナーに依れば、第十八世紀に入つて初めて眞の變化が起つたのであり、従つて第十八世紀こそ寧ろ近世の始點が求められるべきであつた (Vgl. Otto Brunner, "Adeliges Landleben und europaischen Geist 1949)。第十八世紀に至つて、「工業社會の出現と共に没落したものは、單に『中世』若しくは封建制度』ではなく、二十有餘年を通じて支配的であつた貴族的構造の世界とその世界像、『陳腐な本質論』、古代の世界主義、『神々と人々とに共通な都市』である」(a. a. O. S. 197) とブルンナーはいうのである。

第十六世紀の時徴として、普通、物理學における進歩が擧げられていた。なるほど、レオナルド・ダ・ビンチが物理學の發展において果たした役割は、大きかつたかも知れない。然しジョージ・サートンに依れば、眞の轉期は物理學においても第十七世紀のガリレオの出現を以て始まるのであつて、時恰かもフラン

スにおいてはルイ十一世が、イギリスにおいてはヘンリー七世が、スペインにおいてはフェルジナンド王が、封建國家解體のために精力を傾けていたのである (Cf. George Sarton, "Science and Learning in the Fourteenth Century" 2 vols. 1948)。

又貴金屬の流入に依る物價の騰貴を以て第十六世紀の時徴とは看做し難い。貴金屬の流入が原因となつて、確かに物價は三倍から五倍となつた。然し第十六世紀の價格革命は、物價の不斷の上騰のための劃期的な轉期ではなく、一時的に突發した現象というに過ぎないのであつて、決して第十六世紀を意味付ける積極的な事件ではなかつたのであつた。

既に明らかであるように、第十六世紀を以て最早や一つの大きな轉期とは看做し難い。然し尙も第十六世紀というこの時代の持つ新しさについていなければならぬとしたならば、一、傳統的教理に對するルターの反抗、二、宗教改革に依る人間と神との關係の更新、三、第十三世紀末以來形成を見た近代國家の廣範な發展と、宗教戰爭の經過のうちに生成した宗教から離れた國家觀の發達、四、主要商業路の擴大、五、個人主義の擡頭、六、國語の確立の諸點が強調されなければならないであらう。(渡邊國廣)

アーサー・L・ダンハム

『七月王朝下における工業労働者』

Arthur L. Dunham, "Industrial Life and Labor in France 1815—1848" Journal of Economic History Vol. III, No. 2, November 1948, pp. 117—151.

フランスにおける工場制工業の成立は、ナポレオン時代を通じて徐々に進行し、七月王朝(一八一五—一四八年)下において遂に本格的段階に到達した。然し工業労働者のうち、大規模工場に雇傭される労働者数は、總人口に比較して未だに少數であり、全工業労働者五、〇〇〇、〇〇〇名の約四分の一に當る一、三〇〇、〇〇〇名に過ぎなかつた。家内工業が依然として根強く、大規模工場に雇傭されるこれ等の労働者は、未だに實力を持つた階級と迄はなつていない。しかも工場労働者の多くが同時に耕作者であつて、工業に頼らずとも生活し得たことは、工業労働者としてのこの人達の結束を亂す重要な原因となつた。フランス工業労働者が獨立の階級となる迄には長い時間を要し、又フランス工業労働者が集團としての存在を意識するようになる迄には更に長い時間を要したのである。當時、工場主が労働者のために何等の考慮も拂わなかつたこと、又工場主